

# 並行した2つの授業で、 日本語教育を実践と理論の両面から学ぶ

2016年度秋学期ティーチングアワード受賞  
対象科目：日本語教育実践研究（6）

日本語教育の専門家を養成する大学院として発足した日本語教育研究科。「理論」「実践研究」「演習」で構成されるカリキュラムのうち、「実践研究」は日本語教育の現場と連携し、教え方や授業運営を学ぶものだ。小宮教授は、本学の日本語教育研究センターに設置されている日本語科目と組み合わせ、学生の学び合いを活用して実践的な指導法を学ぶ授業が高い評価を獲得した。



小宮千鶴子

日本語教育研究科教授

## 学習者任せではない 語彙学習の指導法を実践

今回受賞した授業は、小宮教授自身が担当している日本語教育研究センターの科目とセットで設定された、大学院生対象の授業だ。履修生は大学院での授業に加えて、留学生向けのこの授業にも参加することが求められる。

その授業を見学したり実際に参加したりしながら、大学院の授業では、背景にある理論的な説明を交え、前回の振り返りと翌週の準備を行う。合計で週2回参加する2つの授業でこれを繰り返すことで、小宮教授がどのように考えてどんなクラスを作っているかを実践的に学んでいく。

院生は留学生のクラスにおいてひとりあたり2～5人のグループを担当し、質問に答えるほか、習った言葉を使った会話練習などを行う。そこで求められるのは、学習者を巻き込んで進めることだという。

「質問ボックスのようにパッと答えるのではなく、学習者同士が話し合いながら答えを見つけていけるような司会者になってと伝えています。各自の断片的な知識を持ち寄って、みんなが新しい知識を学んでいけるように導く。院生たちは試行錯誤しながら、だんだん司会が上手になっていきます」。

そこには学習者が学ぶプロセスを知って欲しいという意図がある。

「学習者と机を並べていっしょに困ったり喜んだりしながら、どんな風に勉強しているのか、どこでひっかかるかという部分を知ることが、とても大事なことです」。

中級者を対象にしたこの日本語学習授業では、学習者が自律的な語彙学習力を養うことを目的としている。将来の専門分野で必要となる日本語の語彙を自力で増やせるようにするためだ。そこで、興味のあるテーマごとにグループを作って関連表現を収集し、学期の最後には発表も行う。好きなテーマということもあり、発表はかなり盛り上がるという。

語彙学習は暗記ものというイメージが強く、学習者にとっては苦痛を伴いがちだ。すでに教育歴のある院生たちからも、学習者の自主性に任せるしか方法がないと悩む声は多かった。その点この授業では、興味のある言葉を自分で探してくることで、学習者たちが楽しんで学び、学習効果も上がる。支援して

いる院生たちも「こんな学び方もあるのだ」と手応えを感じるようだ。TAとして他の語学クラスに参加した経験のある院生からは、「この授業ほど学生が生き生きと発表しているのを見たことがない」という感想も聞かれた。

その他、小テストの作成やその実施、宿題の添削なども実際に体験しながら、留意すべきポイントを学んでいく。

### 多様な意見を聞くことが、 大きな学びとなる

学期の後半では、実際に自分が教える教壇実習も行う。事前に大学院での授業において「教案検討」という形で、どの教材を使ってどんな風に教えるかを考える。担当する学生は自分のプランと相談したいことを挙げ、みんなでコメントし合う。それを反映して修正した教案で翌週の実習を行い、さらに次の大学院の授業で振り返りを行う。この流れを通してひとり一人が自分ならどうするかを考えることで、多様な意見を組み込めるだけでなく、他人の実習も自分の学びにつながる。

毎回の授業見学後にはレポートも課している。

「漫然と見ているだけでは身につかないので、板書の仕方を見る、教材の使い方に注目するなど観点を決めて見るように指示しています」。

レポートの内容はCourse N@viにアップロードして互いに見られるようにしてある。学期前半の時間に余裕がある段階では、これを授業内でも取り上げてディスカッションもしている。

「同じ授業でも見る人によって視点が違うので、それをシェアすることは大きな意義があります」。

一般に同じ背景の学生のほうが教えやすいと思われがちだが、日本語教育歴の有無など多様な背景の学生が混在するからこそその学習効果も大きいと小宮教授は感じている。

「ひとりでは気づかないこともたくさんあるので、

他の学生の意見を聞いて自らの考えを深められるメリットは大きいと思います」。

学生からも「教えることが不安だったが、みんながいてくれて良かった」というコメントも寄せられている。

多くの日本語教員に接する中で、教員になるまでの教育は大事だと感じている小宮教授。学生たちに強調しているのは、学習者をともに教室を作る仲間として尊重することだという。

「学習者の知性はあなたたちより高いかもしれない、日本語がつかないというだけで劣った人だと思わないこと。それは繰り返し伝えていきます。間違えたとしても、できた部分は評価すると共に、なぜ間違えたか、次に間違えないためには自分はどうすればよいか考えられる教員になって欲しいですね」。